

原発・食の安全 終わらぬ問い

暮らしの中から見える社会の矛盾をテーマにしたドキュメンタリーを自主制作してきたグループ「映画製作委員会」が、今年で30年を迎える。神戸を拠点に、放射性廃棄物、アトピー、食と農、ハンセン病などをめぐる問題を追い続けた。いずれのテーマも「昔の問題」でも「終わった話」でもない。今も私たちの心に強く訴えかけてくる。



精久森典妙さん

きっかけは素朴な疑問だった。「映画製作委員会」のプロデューサー・精久森典妙さん(68)は、放射性廃棄物が生活に及ぼす影響を探った「24000年の方舟」を作った30年前を振り返る。「電気は身近なのに原発は遠い存在だった。原発に賛成か反対かの二択よりも、原発から生まれる廃棄物を、人類が最終的に処理できないことが問題なのではと思った」

原発のある国に生きることを意味を問いたかった。神戸市の映画会社で働いていた精久森さんと同僚の保木政男さん(故人)、フリーの演出家の高橋一郎さん(63)の3人が中心となり制作した。自分たちでお金を出し合い16、17フィルムで撮って、1986年秋に完成させた。原発の安全性に不安を感じていた世の母親たちが、各地で上



「24000年の方舟」の予告編から

ドキュメンタリー自主制作 神戸拠点に活動30年



「奇妙な出来事 アトピー」の予告編から

映会を開いた。草の根運動のうねりが次作を後押しした。

その頃、日本はバブル景気。「エコロジー」や「環境」という言葉がはやりだした。だが精久森さんは「今までの公害問題を、あいまいな意味の言葉に置き換えてごまかしているように感じた」と振り返る。2作目のテーマは、アトピー性皮膚病。高橋さんの子どもがアトピーに苦しんでいたのがきっかけ。「アトピーは単なる皮膚病ではなく、高度成長の負の遺産ではないか。アトピーは社会への警鐘では」。91年に完成させた「奇妙な出来事 アトピー」には上映依頼が殺到。全国約千カ所で上映された。

アトピーから食の安全性に関心を持った制作陣は、3作目で食と農業をテーマにした。無農薬で米作りをする農家などを取材して、95年に「風ものがたり」を完成させた。2012年にはハンセン病問題1



「風ものがたり」の予告編から

来月1・2日に上映会

10月1、2日に30周年記念上映会が兵庫県立美術館のミュージアムホールで開かれる。1日鑑賞券500円。10月1日は①を午前10時半、②を午前11時5分、④を午後1時、③を午後

1時45分、⑤を午後3時、10月2日は⑥を午前10時半にそれぞれ上映。2日午後2時からの「最後の活動弁士 井上陽一の世界」の上映と活弁ライブは別途500円が必要。問い合わせは映画製作委員会(078・333・8690)。

制作年	作品名
1986年	24000年の方舟
① 1986年	原発から生まれた放射性廃棄物の実態を追った。映画のクランクイン直後の86年4月、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故
② 1991年	奇妙な出来事 アトピー
②	アトピーの症状や治療をめぐる現状を追った。食にも着目し、食品添加物や残留農薬の問題にもふれた
③ 1995年	風ものがたり
③	「食と農と環境」がテーマ。農家や消費者を取材。都市と農村の共生について考えた
④ 2004年	紙芝居がはじまるよ!
④	紙芝居はコミュニケーション。ベテランが演じる紙芝居に元氣よく反応する子どもたちを8台のカメラで撮った
⑤ 2006年	フランドン農学校の尾崎さん
⑤	大阪・能勢町で有機農法による野菜作りを30年続ける尾崎零さんの1年
⑥ 2012年	もういいかい ~ハンセン病と三つの法律
⑥	ハンセン病患者への国家による人権侵害、強制隔離の歴史を追った。多くの証言に基づき療養所の実態を検証

00年の歴史を追った「もういいかい」を制作。03年に熊本県でハンセン病の元患者たちがホテルで宿泊拒否された上に、その後の対応をめぐる匿名の電話や手紙による中傷を受けた事件がきっかけだ。「差別はまだ根強い。ハンセン病問題は終わっていない」と痛感した。元患者たちの「可哀想な物語」ではなく、国家権力の下でどんな人権侵害があったのかをひもとく作品にした。

この30年間にとりあげたテーマは多岐にわたる。共通点をきくと「どれもいまだに何一つ解決していないところか、むしろ当時より悪い方向に動いている」と話す。「24000年の方舟」は、東京電力福島第一原発事故後に話題になり再上映された。「残念なことです」

(伊藤直史)